



人類が進んでいく時、最終的に世界のリーダーシップを取るのはアメリカじゃない。ヨーロッパから出てくる一人の人物が、この世界を完全コントロール下に置くと言ってますね。ヨーロッパのローマ帝国の末裔から出ると言ってるんです。

実は福音派の力が全く通用しない時代がやってきます。福音派の人たちが世界から忽然と姿を消す時が来るからです。選挙があっても、選挙民として福音派の人たちが一人もいなくなる時代。携挙が起こるんです。

携挙は、やがて人類が突っ込んでいく艱難時代の前に起こり、世界中の本物のクリスチャンたちがみんな引き上げられる。

これを言うと必ず、自分は本物かどうか分からないから、その話を聞いて不安になったと。そんな方は、今度一日セミナーやるので来てください。

艱難時代に反キリストが登場します。艱難時代は7年間ですが、前半3年半はどちらかというと裏方です。前半3年半に世界をコントロールするのは世界統一宗教。おそらく、携挙後に残った大きなキリスト教会が中心となって、いろんな宗教を統合していくと思います。前半3年半で本当に力を持っているのはこの宗教団体です。が、この宗教団体が反キリストによってメチャクチャに破壊されます。

後半3年半は、反キリストが本領発揮、正体むき出し、悪魔の化身となって世界を牛耳ります。それをやめさせるためにキリストが地上再臨して、7年間の艱難時代が終わるんです。

今日のダニエル書 11 章第 4 部の 36~45 節は、特に反キリストの7年間の中間期と最後について語っています。

自分のノートを見たら、ダニエル書 11 章は8月に始まって、もう11月ですよ。4か月かけて。月1回しかしないから、こんなに時間がかかったんですけど。

今日は、終末預言のクライマックスー艱難時代の中間期に起こる出来事、および反キリストの最後・結末について見ていきます。

まず復習です。前回は、アンティオコス4世エピファネスについて預言されている箇所を解説しました。アンティオコス4世エピファネスはユダヤ人を大弾圧して、割礼禁止・安息日禁止・ユダヤ人と名乗るのも禁止・神殿の中にはゼウス神の偶像設置・羊や牛の代わりに豚の血を流し、祭司たちに豚の内臓を食べさせた。そんなムチャクチャな、反キリストのひな型のアンティオコス・エピファネスに対抗したのがレビ族のマカベア一族です。

マカベア一族が次から次へとアンティオコス・エピファネスの軍隊を蹴散らして、ついにエルサレムを奪還し、3年間独立を保つんです。

3年の間、エピファネスによって散々汚された神殿をきれいに清めますが、清めるための儀式の祭りを作りました。ハヌカの祭りです。ハヌカの祭りは大体12月末ころ、クリスマスシーズンが多いんです。これがハヌカの祭りのスタートです。

**35 賢明な者たちのうちには倒れる者もあるが、それは終わりの時まで、彼らが**

**練られ、清められ、白くされるためである。それは、定めの時はまだ来ないからである。**

賢明な者たちは賢明な選択をした者たち。ギリシアの偶像崇拝に墮落するのではなく、イスラエルの神、アブラハム・イサク・ヤコブの神に忠誠を誓って、信頼して従っていった人たち。

ところが、賢明な選択をしたのに幸せな終わり方ではなく、賢明な者たちのうちには倒れる者もある。マカベア一族とその末裔の最後は悲惨ですよ。

良い選択をしたら、当然良い結果を期待するんですが、信仰的に良い選択をしたのに倒れる者もある。なんで？それは、定めの時はまだ来ないからである。

実は信仰者は矛盾の中で成長するんです。良いことしたら良いことが起こる。

正しいことしたら正しいことが起こる。親切にしたら親切が返ってくる。

そこには何の悩みもありません。でも、良いことしたのに報われなかった。正しいことしたのに誤解された。神よ、いったいなぜですか？

ここで、清められたり自己吟味が始まって、信仰者として深められていくんです。

だけど、そんなことはいつまでも続きません。定めの時はまだ来ないからである。

最終的には、良い選択には良いことだけが起こる時代、メシア的王国時代／千年王国時代が来ます。定めの時に来るまでは、この世界は悪が勝ち誇っているように見えるけど、その矛盾を通して、信仰者たちは清められて成長する。

定めの時に来たら、そんな矛盾はない。この定めの時が艱難時代です。

艱難時代で地上再臨という定められた神の裁きの後で、メシア的王国／千年王国という非常に理にかなった時代が来る。

ということで、35節までは定めの時以前の預言です。

35節から2000年以上の間があって、36節以降が艱難時代のことです。

旧約聖書の預言は、イスラエルを中心に語られていますよね。

実は旧約聖書の中に絶対に出てこない、大きな共同体があります。

それはイエスを信じるクリスチャンたちの共同体で、教会と言います。

教会時代は旧約聖書に出てきません。35節と36節の間に教会時代がすっぽり入ると思いますが、ダニエル書は旧約聖書なので、教会時代は出てこない。

35節の後にいきなり36節、一番最後まで飛ぶのかと、ちょっとビックリするんですが、そういうふうに理解してください。

今日説明する箇所は予備知識がかなりないと、「あの人、何喋ってんの？何言うてるか分からへん」と。そういう方は『ざっくり黙示録』を聞いていただいたら、理解の一助になるのではないかなと思います。

できるだけ分かりやすいようにと努力しますが、分からない時は、後でクリスチャンに質問したり、調べたりしてみてください。

**36 この王は、すべての神よりも自分を高く上げて大いなるものとし、神々の神（聖書の神）に向かって驚くべきことを語る。彼は栄えるが、ついには神の憤りで**

**滅ぼし尽くされる。定められていることがなされるからである。**

主語はこの王ですが、**35 節**までの王アンティオコス 4 世エピファネスではありません。**36 節**に描写されていることに、アンティオコス 4 世と合致しないことが多いからです。明らかに別人のことを語っているのが分かるんですね。

**36 節から 39 節**は反キリストの 7 つの特徴。**40 節から 45 節**は艱難時代の間中期から反キリストの最期に関する預言。この観点で見えていきます。

### **反キリストの 7 つの特徴 (36 節～39 節)**

#### ① 思いのままにふるまう。

思いのままに振る舞える力・政治力・権力を既に握っているんです。

だれだって思いのままに振る舞いたいと思うけど、その思いを遂げるだけの実力が無いじゃないですか。

プーチン・習近平・金正恩も、思いのままに振る舞えるのは自分の国の中だけです。トランプになったら、いろいろ遠慮しなあかんことも出てくるでしょう。

でもこの王は、思いのままに振る舞える政治力・財力・権力・人の良心までもコントロールするような力を持っているようですね。

というのは、すべての神よりも自分を高く上げてとあるように、彼は自分自身を神としているからです。全世界の人に、自分への礼拝を強要できる力を持っている。

#### ② 神々の神（聖書の神）に向かって驚くべきことを語る。

聖書の神に対して驚くべき憎悪・憎しみを持っている。

神々の神という言い方は、既に**ダニエル書**に出ていました。

**2 章**で、神性バビロニア帝国の 2 代目の王ネブカドネツアルが見た夢を、ダニエルが見事に解き明かします。その解き明かしを聞いてすっかり感服したネブカドネツアル王は言いました。「あなたの神こそ神々の中の神。あがめられるべき方だ」バビロンは多神教なので神々がいっぱいいる。だけど、「ダニエルよ、あなたの神、イスラエルの神、アブラハム・イサク・ヤコブの神、聖書の神、あなたが信じている創造主である神こそ、神々の中の神だ」

神の前では全てのものは無でしょ。どんな立派な人も、神の前には無に等しい。

神々の神とは、この本物の神の前には、どんな神々も無ということです。

圧倒的な全知全能者である神。

**詩篇 136 篇**にも「神の神であられる方に感謝せよ」と出てきます。

旧約聖書で語っている神、ダニエルが信じている神、明らかにヘブル的な神々の神に向かって驚くべきことを語る。

新改訳第三版は「あきれ果てるようなことを言う」新共同訳聖書は「恐るべきことを語る」つまり冒涇の言葉。

中指を立てるのは、相手に対してものすごい侮辱ですね。

汚い言葉の Fワードもありますね。それを言うとだれでも怒る。相手をないがしろにして、貶めて、汚すような言葉。その恐るべき言葉を、最も恐るべき神に向かって言う。つまり、聖書の神に特別な憎しみを持っている人物なんですよ。

聖書の神を憎まずにはいられないという本質が、反キリストの 2 番目の特徴です。

③彼は栄えるが、ついには神の憤りで滅ぼし尽くされる。定められていることがなされるからである。

35章では、定めの時が来ていないので不公平があるということでしたが、この定めの時とは何か。反キリストは栄えるけど、永久には栄えません。

なぜ栄えるのか。反キリストに対抗できる力を持つ人間が、誰もいないからです。しかし、神自ら人となって地上まで下りて来て、コイツを始末します。

彼は栄えるが永久ではなく、ついには神の憤りで滅ぼし尽くされる。

滅ぼし尽くされる時が、イエス・キリストの地上再臨です。

その時、反キリストは全く脱力して滅ぼされると書いてあるんですね。

つまり、キリスト以外は誰も、反キリストに勝てない。でも、最後はキリストによって滅ぼされることが定められている人物が反キリスト。

**④37 彼は先祖の神々を心にかけて、女たちの慕うものも、どんな神々も心にかけてない。すべてにまさって自分を大いなるものとするからだ。**

彼は先祖の神々を心にかけて。ここから、反キリストが異邦人だと分かりす。

キング・ジェームズ訳聖書は英語の聖書の中で非常に高い評価を受けていますが、単語があまりにも古いので、キング・ジェームズ訳を基に訳したニュー・キング・ジェームズ訳が出ています。これも非常に評価が高い。

ある人は大嫌いと言うんですけど、重んじている方もいます。

その聖書によると、彼は**先祖の神**を心にかけて。GodsではなくGod。

Godと単数形で訳すなら、反キリストの先祖はユダヤ人になるんですよ。

ユダヤ人の先祖アブラハム・イサク・ヤコブ、そして旧約聖書の聖徒たちは、唯一の神を礼拝するからです。

だから、彼は先祖の神を心にかけてと訳すと、反キリストはユダヤ人から出るということになってしまふんですよ。私もね、そういう注解書を読んできたんです。

だけど今回、ユダヤ人の研究者のものをGoogle翻訳して分かったんですが、ここでの神は複数形の神々です。

彼は**先祖の神々**を心にかけて。反キリストは神々、多神教の先祖を持つ人物なので異邦人なんです。ユダヤ人じゃない。異邦人であることが4番目の特徴。

⑤女たちの慕うものも、どんな神々も心にかけてない。

私が読んできた注解書では、女たちの慕うものはメシアだと言うんですが、それは、先祖の神と捉えたからです。

反キリストはユダヤ人なんだ。ユダヤ人から出てくるんだ。多分ダン部族から出てくるんだ、というアレですよ。だから、女たちの慕うものはメシアに違いないと。

これは原文を見ると、女たちの願うもの、女たちの願望に心にかけてない。

ものは平仮名です。メシアなら“者”なので、これは人格あるものではありません。

女たちの慕うものは、単に女たちが願うこと。彼はそれに何の関心もない。

あんまり言いたくはないけど、国民民主党の玉木代表、もう不倫のことですね。

潔く謝っている部分は好感持てるんですけど、どうですか？…って言われてもね。

あんな恥ずかしいこと、みんなの前でごめんなさいって。つべこべ言わないところは潔いと思うけど、何であんなことするのかなと。103万円の壁どうすんねんと。またね、このタイミングまで、ずっとネタを秘密にしてバツとやるという。有名な人は付け狙われていると思った方がいいですよ。何か弱みを掴まれて、ここ！っていう時に出される。

でも、権力・お金・能力があって、そこそこ男前で、選挙でボロ勝ちして議席を4倍に増やして、それで調子に乗るな、言うても難しくないですか？  
そんだけ思いどおりになって、冷静に、あるいは落ち込むことができますかね？  
数字見るたびについウフフとなって、世間に向かって「かかって来い！」みたいな気になるような。そうなっていった時、男性は若い女性に弱いんじゃないですか？  
年老いた女性には多分大丈夫だと思います。若い女性に。  
“英雄色を好む” じゃないけど、いろんな国の独裁者や日本の戦国武将でも、強い人はたくさん側室を持ったり、やりたい放題の限りを尽くす。  
中国の三国志見てたら、度を越えてるじゃないですか。病気以外の何ものでもない。

反キリストは絶対権力を手に入れて、何でも自分の自由になるんですが、女性に何の心もかけません。実は彼はただの人じゃない。出生の由来が普通の人間じゃないんです。イエスが100%人だけど処女から生まれたように、聖書には、墮落した天使と人間の女の間にも生まれる子孫が出てきます。それをネフィリムと言います。

キリスト預言の最初に原福音預言があって、罪を犯したアダムとエバに、「わたしはおまえたちのために救い主を送る」と預言してくださるんです。  
その時、蛇に言うんですね。「おまえの子孫と女の子孫の間に敵意を置く」  
女の子孫は、女だけから産まれる子孫。精子と卵子の受精卵の細胞分裂で生まれる子孫じゃない。処女降誕のイエス・キリストのことです。

聖書の解釈方法として、1行に同じ単語が出て来た時は、一方に適応した解釈を、もう1つの単語にもしなければならぬというのがあります。  
おまえの子孫と女の子孫の間に敵意を置く。女の子孫が女だけから産まれる子孫なら、おまえの子孫も同じように超自然的な誕生の由来を持っている。  
なので、女たちの慕うものも、どんな神々も心にかけない。  
女たちの願いに何の関心もない。人々がウツトリするどんな神々も、彼の心を動かさない。これはある種の超人です。普通の人間は、とてもじゃないけど太刀打ちできない存在。

**⑥38 その代わりに彼は砦の神をあがめ、金、銀、宝石、宝物をもって、彼の先祖たちが知らなかった神をあがめる。**

彼は自分で自分のことを神だと名乗るんですが、彼自身もある神の信者なんですね。砦の神を礼拝するんです。後で読んだら分かりますが、どんな砦も難無く陥落させる神。戦の神。サタン／悪魔のことです。  
聖書で竜とか古い蛇と言われている、全ての争い事の根っこにあるもの。

その岩の神／悪魔を、彼の先祖たちが知らなかった神をあがめる。

彼の先祖たちはローマ人です。反キリストはヨーロッパから出るんですね。

ローマにはローマ 12 神といって、ビーナス・ゼウス・ヘラクレスなどいろんな神がいますが、これはオリンポスの山に住んでいると言われるギリシア 12 神が基なんです。名前が変わるだけで結局は一緒。

彼は今までギリシア神話・ローマ神話に出てこなかった、先祖たちが知らなかった神／悪魔を、金、銀、宝石、宝物をもってあがめる。

実は悪魔は、神に創られた時は悪い存在ではなかったんです。

神は良い方なので、悪いものをつくることはできない。悪いものは出てこない。

良い方からは良いものしか出てきません。神が悪魔を創ったんじゃないんです。

神が最初に創ったケルブ（御使いの最高位）の中の、最高位である油注がれたケルブが、エデンの園を守るように管理者として任命を受けていました。

その時のエデンの園は、アダムとエバがいたエデンの園ではなく、金、銀、宝石、宝物に取り囲まれている世界なんですね。

つまり、悪魔が墮落する前に持っていて、自分の王国のように錯覚していたものを実現するために働くのが反キリスト。悪魔のために全生涯、持てるもの全てで悪魔に仕える、悪魔の化身のような人間。それが反キリストです。

**⑦39 彼（反キリスト）は異国の神（岩の神）の助けによって城壁のある岩を取り、彼が認める者には榮譽を増し加え、多くのものを治めさせて、代価として国土を分け与える。**

反キリストは異国の神の助けによって城壁のある岩を取る。

異国の神は岩の神。先祖たちが知らなかった神なので異国の神と言ってます。

どんなに堅固な城壁でも簡単に陥落させる悪魔的な力で、どんな軍隊・軍事基地も容易に潰すことができる。悪魔の力で世界を制覇する人物が反キリストです。

では、反キリストはどんな力で軍事基地を潰していくのか。

これは**黙示録**に出てくるんですね。**黙示録**に 2 億の軍勢が出てきます。

2 億の軍勢って中国軍のことちゃうか？一時そう解釈されたこともありました。

2 億の軍勢の描写で、赤・紫・硫黄の黄色の胸当てをして馬にまたがっている者がいるんですが、その馬の頭がライオンで、口から煙や炎や硫黄を出してる。

しっぽは蛇で、しっぽの先端が蛇の頭。その蛇に噛みつかれて人が死んでいく。

聖書には、御使いがいろんな動物を合体した姿で描写されているんですよ。

例えば、人のような顔を持ち、牛のような顔を持ち、ライオンのような顔を持ち、みたいな。人間が知っているいくつかの動物の特徴を合体しているような。

まさにこれが、永井豪の『デビルマン』に出てくるんです。

いつかデビルマンの解説をさせていただきたいと思うんですが、永井豪は**黙示録**と『ダンテの神曲』でデビルマンを描きました。

これを描いた後に寝込んで、半年間執筆をやめたという、すごい作品ですよ。ただ、あの漫画は悪魔は善であるという観点で描いてあるので、読んでたら気が狂いそうになるんですが、デビルマンに熱中していた私は永井豪に手紙を書いて、直筆の返事をもらったんですね。そんな話は別の機会にしたいと思います。

2億の軍勢は普通の人間じゃないんです。馬かライオンか蛇かサソリか何か、わけの分からんいろんな生物が合体している姿。これは悪霊の姿なんです。悪霊だけで2億。その力を使って攻撃した結果、人類の1/3が死んだと書いてます。ステルス戦闘機やドローンではありません。それなら対処のしようがある。反キリストは純然な悪魔の力と悪霊の力で、**城壁のある砦・最先端の軍事基地・幾重ものレーダーや地下に守られている軍事基地も全部陥落させます。砦を取る。**この力の前では、どんな最先端の近代兵器も手も足も出ません。もう恐ろしい。なので、反キリスト自身は国を持ってないけど、大きな力を思いのままに振るうことができるんですね。この段階で、世界人口の半分が消えてしまいます。これが**艱難時代**の**中間期**です。

彼が認める者（反キリストを神と認め、礼拝する者）には**栄誉を増し加え、多くのものを治めさせて、代価として国土を分け与える。**

反キリストを拝まない人はどうなるんですか？

彼らは反キリストのマーク（666）を体に付けられません。666の数字を額か右手に受けない人は、だれも売ること買ってもできないようにします。

反キリストは、自分に従わない人は**全ての経済活動ができないようにコントロール**するんです。従う人はすごくいい待遇を受けるけど、従わないなら**殉教**というか殺される。ここまでが反キリストの特徴です。

### **艱難時代の中間期から反キリストの最期に関する預言（40節～45節）**

その説明に入る前に、まず**艱難時代**の**戦争**についてざっとお話しします。

世界は、全世界が参加する戦争を今までに2回経験しています。

第一次世界大戦と第二次世界大戦です。

ところが、**艱難時代**の7年間に、全世界が参加する戦争が3回起こるんです。

1回目は**艱難時代**の冒頭、2回目は**艱難時代**の**中間期**、3回目は**艱難時代**の**最後**。

1回目は**艱難時代**の冒頭の戦争。**黙示録**で子羊が封印を解いていくんですね。

1つ目の封印を解くと、白い馬に乗った者が出てきます。これは反キリストです。

反キリストはまるで、正義の騎士であるかのように登場するんですね。

2番目の馬は赤い馬。剣の災害をもたらす馬／戦争の馬。反キリスト登場の冒頭に戦争が起こる。3番目は黒い馬で飢饉。4番目は青ざめた馬でパンデミック。

これらによって人類の1/4が死にます。

1回目の**艱難期**内の**第一次世界大戦**で、人類の1/4が死滅するんです。

2回目は**艱難時代**の**中間期**に起こる戦争。残っている3/4のうちの1/3が死に絶えるので、この時の世界人口は1/2になります。

3 回目は地上再臨するキリスト軍と、それに逆らう反キリスト軍の戦争。  
これがハルマゲドン戦争です。

これら 3 つの世界戦争が起こりますが、**ダニエル書 11 章**は 2 回目の戦争について書いてあります。この 2 回目の戦争が非常に重要なんです。  
反キリストがいよいよ本性を現すのは、後半 3 年半になってからなんですね。  
そのことに、2 回目の戦争は決定的な役割を果たすんです。

もう 1 つ、予備知識として持っていただきたいことがあります。  
今、国連加盟国は 193 か国ですが、やがてこれがワンワールド、世界は統一政府によってまとめられると、**ダニエル書**は預言しています。  
しかし、この統一政府はうまくいかなくなるので、結局世界は 10 か国になる。  
10 のブロックで固まっている 10 か国の状態で艱難時代に入ります。  
しかし、中間期を経ると、そのうちの 3 か国が反キリストとの戦争に敗れて 7 か国になります。つまり、前半 3 年半は 10 か国、後半 3 年半は 7 か国。

この戦争について書いているのが 40 節以降なんですね。

**40 終わりの時**（艱難時代の中間期）に、**南の王が彼**（反キリスト）と戦いを交える。北の王は戦車、騎兵、および大船団を率いて南の王を襲撃し、国々に侵入し、洪水のように通り過ぎる。

終わりの時（艱難時代の中間期）に、南の王が彼（反キリスト）と戦いを交える。  
南の王。南はイスラエルから見た南です。

**11 章**ですと南の王と北の王が出てきましたね。その時の南の王はプトレマイオス朝エジプトでした。イスラエルから南の大きな国。そのプトレマイオス朝エジプトが支配していた領域は、現在のエジプト、およびマグレブ諸国。  
マグレブ諸国はアフリカ大陸の地中海沿岸の国々・エチオピア・スーダン。南の方。つまり、エジプトを中心とするアフリカ諸国です。  
その南の王が反キリストに戦いを挑むことで、この中間期の戦争が始まるんですね。

ところが、ここからが問題なんですよ。

北の王は戦車、騎兵、および大船団を率いて南の王を襲撃し、国々に侵入し、洪水のように通り過ぎる。

この訳だと、「南の王が反キリストに戦いを挑んだ。すると、北の王が反キリスト側に立って南の王を攻撃した」ということになりませんか？なりますよね。

終わりの時に、**南の王**が彼と戦いを交える。北の王は戦車、騎兵、および大船団を率いて**南の王**を襲撃し、国々に侵入し、洪水のように通り過ぎる。

南の王が 2 回出てきますが、ヘブライ語原文の 40 節には、南の王は 1 回しか出てきません。直訳では「北の王は大船団を率いて**彼**を襲撃し」と書いてあるんです。

新改訳 2017 の翻訳者は、ここの**彼**を南の王と取ったんですね。だけど、原文では南の王とは書いてない。**彼**と書いてある。だったら、**彼**でいいと思います。

そうすると前後の文脈から、彼はずっと反キリストのことなので、「北の王と南の王は共に反キリストを襲撃した」ことになるんですよ。それが正しいです。フルクテンバウムさんの英語のやつにそう書いてありました。私も一応原文を調べて、そうだなと。私の功績ではなく、パクリで皆さんに提供してるだけなんです。

**41 彼（反キリスト）は麗しい国（イスラエル）に攻め入り、（イスラエルの）多くの者が倒れる。しかし、エドムとモアブ、またアンモン人のおもだった人々は、彼の手から逃げる。**

この預言が成就する前に、イスラエルは存在していなければならない。

しかも、麗しい国になってるんですね。

なぜイスラエルの多くの者が倒れるのか。艱難時代は、反キリストがイスラエルに対して、何かあったら守ってあげるといふ7年間の和平条約で始まるんです。

戦争になれば、反キリストがイスラエルを守ってくれるはず。

なのに、なんと彼（反キリスト）は麗しい国（イスラエル）に攻め入る。裏切った。艱難時代のちょうど中間期、反キリストはイスラエルを裏切り、イスラエルに攻め込みます。その結果、多くの者が倒れる。戦争経験豊富なイスラエルが簡単に倒されてしまうのは、反キリストに特別な力があるからです。

その強力な力を持っている反キリストでも、通用しないエリアが3つありました。しかし、エドムとモアブ、またアンモン人のおもだった人々は、彼の手から逃げる。エドム・モアブ・アンモンは現在のヨルダンです。

艱難時代中間期、ヨルダンは超自然的な神の力で守られて、反キリストの悪霊の力も通用しない避難場所エリアになるんですね。

艱難時代後半、ユダヤ人はヨルダンのペトラに行って身を隠すと言われていました。

なぜ急にペトラのことを言うのか分からないでしょ。でも、それを説明してたらぐちゃぐちゃになるので、ざっくり黙示録をまた見てください。

**42 彼（反キリスト）は国々に手を伸ばす。エジプトの地もその手を免れることはない。**南の王の中心地であっても、反キリストを前になす術もない。

**43 彼は金や銀の被造物と、エジプトのすべての宝物を手に入れ、ルブ人とクシュ人が彼につき従う。**

ルブ人はアフリカの北の方、今のリビアです。カダフィがいたところ。

クシュ人はエチオピア人。ナイル川の上流の方ですね。

自分たちの頭がやられてしまったので、マグレブ諸国もエジプトもみな、反キリストに従います。

**44 しかし、東と北からの知らせが彼をおびえさせる。彼は多くのものを絶滅させようとして、激しく怒って戦いに出て行く。**

前に、北の王が大船団を率いて反キリストを襲撃するとありました。

**11章**全体を見ると、この北はセレウコス朝シリアです。セレウコス朝シリアの最大面積はトルコからパキスタン。インド国境まで全部、セレウコス朝シリアが治めます。

それらの国々が、エジプトを貪り食っている反キリストを背後から攻めるだけでなく、東からの知らせもある。

**ダニエル書**にはアンティオコス・エピファネスが東を攻めたと出てきますが、東はメソポタミアのことです。東はイスラエルから見て東というのも当然ありますが、非常に注目される箇所があるんですね。

### 創世記 11章

**1**さて、全地は一つの話しことば、一つの共通のことばであった。

**2**人々が東の方へ移動したとき、彼らはシニアルの地に平地を見つけて、そこに住んだ。

東の方、シニアルの地は今のシュメール／メソポタミアです。メソポタミアはギリシア語で2つの川の間土地という意味で、今のイラクとイラン。

イラクとイランが南の国でも北の国でもなく、独立した別個の1つの固まりになってるようですね。南のエジプトが貪り食われている時に、北と東が反キリストに襲いかかるので、彼はその知らせにおびえて、激しく怒って戦いに出て行く。

この3つの国が反キリストに逆らいました。初めは10か国でしたね。

そのうちの3か国が反キリストに逆らうので、彼はこれらを滅ぼして7か国になるんですよ。艱難時代前半は10か国。後半は7か国になる。

激しく怒って戦いに出て行く時に、反キリストが本陣を敷く場所が45節。

**45**彼は、海（複数形）と聖なる麗しい山（エルサレム）との間に、本営の天幕を張る。しかし、だれも助ける者はなく、ついに彼は終わりを迎える。

エルサレムに関連する複数の海は、地中海と塩の海／死海です。

地中海と死海の間にある聖なる麗しい山／エルサレムに、本営の天幕を張る。

この3か国と戦う時、反キリストはエルサレムに中央指令センターを置きます。

それまでは、ほかのところにいたようですね。しかし、艱難時代の真ん中に、おそらくヨーロッパからここに移住して、3か国を討伐するための指令センターに自ら入ります。

ところで、この3か国はなぜ、中間期に反キリストに挑みかかったのか。

ここからは聖書に書いてません。私の推理です。でも、推理するから楽しい。

今言ったトルコからパキスタンまで、そしてイラン・イラク、マグレブ諸国・エジプトからエチオピアまで、この3つの国に共通するのは、イスラム教を国家宗教にしていることです。イスラム教が国家宗教の国は、アラー以外絶対に拝みません。

反キリストは、中間期に「俺が神だ」と名乗るんですね。

なので、その強要に猛然と反発して、この3か国が立ち上がった…のではないかと。

書いてませんよ。でも、ちょっとリアルな感じしませんか？

でないと、反キリストに立ち向かうために、これらの国民が戦争に協力するとは思えない。よっぽど腹に据えかねる何かがあって、反キリストなんかやっちゃまえと立ち上がったのではないかと思います。

しかし、だれも助ける者はなく、ついに彼は終わりを迎える。

これを読むと、3か国と反キリストが戦った結果、3か国の方が勝って、ついに彼は終わりを迎えるということになりますよね。実際はそうなりません。

3か国との戦いで反キリストは戦死しますが、3日目に復活するんです。

でも、**ダニエル書**にはそこまで詳しくは書いてないので、この先のことは**黙示録**を読まない限り分からないんです。

### 黙示録 13 章

**1 また私は、海（異邦人世界・特に地中海）から一頭の獣（反キリストが支配する国と反キリスト自身）が上がって来るのを見た。これには十本の角と七つの頭があった。その角には十の王冠があり、その頭には神を冒瀆する様々な名があった。**

これには十本の角と七つの頭があった。獣の国は10か国連合でスタートします。七つの頭は7か国のことではありません。神に逆らう異邦人帝国は7段階の発達段階を遂げて、最終的にここになるということです。

7番目の最終形が、艱難時代に登場する反キリスト帝国です。

**3 その頭のうちの一つ（反キリスト）は打たれて死んだと思われたが、その致命的な傷は治った。全地は驚いてその獣に従い、**

**4 竜を拝んだ。竜が獣に権威を与えたからである。また人々は獣を拝んで言った。「だれがこの獣に比べられるだろうか。だれがこれと戦うことができるだろうか。」**

この戦争で3か国は滅びます。反キリストも一度死ぬんですが、悪魔の力で復活するのを見て、残りの7か国は彼に忠誠を誓うんですね。

ところで、艱難時代のユダヤ人たちは、自分の身に起こっていることについて、**ダニエル書**を頼りに励ましをもらいながら生きるとは思いますが、**黙示録**は読みません。彼らはイエスをメシアと信じていないので、**黙示録**を聖書とは認めてないから。しかし、艱難時代の事件については、**ダニエル書**だけでは啓示が不完全なんです。**ダニエル書**に書かれていない、より詳しい艱難時代の預言は**黙示録**にあります。

**黙示録**に書いてあることを、ユダヤ人の二人の預言者が解き明かすんですね。

それで、自分たちが今日の前で見ていることや事件は、**ダニエル書**だけでなく、**ダニエル**でさえ教えられていなかった、より精密な詳しい預言が**黙示録**にあることを知って、イエスこそメシアだと信じる準備がなされていくんです。

なぜなら、**ヨハネの黙示録**の語り手はイエスだからです。父から受けたものを、御使いを通して、パトモス島にいるヨハネに与えたのが**黙示録**だと書いてあります。

つまり、旧約聖書だけでは完全な啓示にならない。旧約と新約両方とも全て信じて、初めて世界のことが分かるし、神のみこころを正確に知ることができるんですね。旧約聖書が書かれた目的は、イエスこそメシアであるということです。新約聖書は、その旧約預言がイエスの生涯の中で全て実現した、ということの証明です。いかがでしょう。メシアの救いこそが絶対の安全圏なんです。

ある集會に招かれた時、30代の男性がいました。彼は乳児院で育ったんですよ。家庭の事情で生後2か月か3か月の時に乳児院に預けられて、そのまま18歳までずっと児童福祉施設で、自分のお父さんもお母さんもない。18歳になったら自動的に出て行かなきゃならないんですが、彼、クリスチャンなんです。いろんな方をキリストに導いて、賢い女性と結婚して、お子さん3人とえられて。「高原さん、いつもYouTube見てますよ！」と励ましてくださいました。「Aさんて、全然ひねくれてませんよね」「高原さんも似たようなもんじゃないですか」「いや、私なんか比べもんになりません。すごいなと思います」

その児童福祉施設で、自分を担当してくださったお兄さんみたいな先生が、同じ境遇だったんです。

「僕も預けられて育ったけど、世間が自分のことを何と言おうが、イエス・キリストという砦に入れば、どんな力も悪魔の力も、それを落とすことはできない。イエスが僕のためにこの世界に来てくださった。そのためにイエスも私生児と言われたというのを読んだ時、僕の気持ち分かるのは、イエスしかいないんじゃないか」イエスを経験した人が次、また次の世代にバトンタッチして。

この方は今も生きておられます。だから、聖書を通して私たちに語りかけているイエス・キリストは本物の救い主です。その本物の救い主が、また私たちを迎えるために、今にも来ようとしておられる。それが携拳ですね。

このシリーズで皆さんにお伝えしているのは聖書の真実さです。真実な神が語ったことばなので真実です。この方は、あなたを完全に守ることができます。ぜひイエス・キリストを信じてください。心からお勧めします。

☆\*: .. 0 ...:\*☆ ☆\*: .. 0 ...:\*☆ ☆\*: .. 0 ...:\*☆ ☆\*: .. 0 ...:\*☆ ☆\*: .. 0 ...:\*☆

引用文献；新日本聖書刊行会『聖書 新改訳 2017』いのちのことば社,2017